
冬空に紡がれる小さな名もない物語

かめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬空に紡がれる小さな名もない物語

【Zコード】

Z6422Z

【作者名】

かめ

【あらすじ】

男混じりの女の子の気持ちを描いた短編です。（20×20 4
1枚程度）

他サイトとの重複投稿しております。

休日の学校といつもののは、灰色っぽいイメージが沸く。わたしの勝手な想像なのだけど……

それは今日の天候のせいであるかも知れない。冬の朝空にはありふれた、分厚い雲が漂っていた。

普段は訪れない休日の学校を、締め切つた窓越しに眺めている理由は、今日、我が文芸部部室の大掃除があるからだ。

わたしは部室棟、いわゆる旧校舎の3階にある文芸部部室から、生徒たちの往来がなく、より一層冬の寒さが身に染みわたっているであろう本館の校舎を、牛耳つた気分で眺めていた。大した喜びはない。

その校舎に隣接している校庭では、野球のコニーフォームに身を固めた男子生徒たち数人が、ダイヤモンドを中心練り歩くように整備をしていた。ふと考えてみると、彼らは休日でも、毎週平然と学校に来ているのか……今まで全くの無関心だった事柄を知らされると、それだけで何故かいたまれない気持ちになった。しかし実際それは、わたし基準のもの考え方であって、彼らからすると、休日も部活に縛られるのは当たり前、というか縛られるという表現ではなく、むしろその状況を楽しんでいるのかも知れない、と心の中で勝手な自己解決に至る。たかが一人の女子生徒に、野球に打ち込む情熱など分かるわけがないのだから。

部室の中は、先ほど点けた石油ストーブがようやく部屋の中を暖め始めて、外気との差を増大させている。部室とは言つても昔使われていた資料室のような場所を一時的に、文芸部と命名しただけの

もので、依然、奥に並んだ棚には古い資料が雑多としている。

真ん中には長机が二つ並べてあり、椅子が5個、均等に配置されている。窓側にストーブが置かれていて、他にあるものといえば、扉付近の棚に本が数冊、巻立てのようなものの中にサッカーボールとバドミントンのラケットなどが立ててある。いつもやの体力作りの名残であるのだけれど、部員からは“遊び道具”と称されている。

今日の大掃除は、わたしが勝手に提案して、部員全員に呼びかけた。思い立ったのが3日前だったので、最短で皆の予定が合う冬休み初日の決行となつた。

少し広さのある部屋にただ一人。静寂の中にストーブが唸る音だけが聞こえている。

制服の上に羽織つたコートを、わざとらしく大胆に脱ぎ捨てる。一人でいると無性にやりたくなる行為。コートが汚れるだけで意味はない。捨てたコートを拾つて払い、手近にあつた椅子の背に掛け、そのまま崩れるように深く座る。ストーブの前を陣取り、吹きさらしの膝と太ももに温風を与えることにした。

「あーあ……」

何の脈絡もない言葉が漏れる。退屈しているわけではないのだけれど……

大掃除の開始予定まではまだまだ時間があり、それまでにわたしがやるべきことを考える。

昨日の朝、同じ文芸部部員2年の“ゆき”から急に持ちかけられた話だ。そのことに関しては以前から彼女に相談役として聞いてもらっていたのだけれど、とうとうしびれを切らしたのか、彼女が言うには大掃除の前に、それを成さなければ絶交だそうだ。十年来の縁もずいぶん軽いな、と僕しく思ったのだけれど、それは彼女のわたしに対する助け船だったのだろう。わたしが決意を固めたのも、それが大きな要因になっていた。たとえ冗談としても、絶交は嫌

だから。

時計に目をやると、そろそろ彼のやつてくるだらう時間が近づいてるのが分かつた。先ほどからひつきりなしに気にしているので、時計の針の形は幾分の違いも見せてはいない。

あしたあした、と先延ばしにしてきた事柄がとうとう限界を迎えた。終いには来年でいいか、と1年、日の目を見させずに仕舞い込もうかと何度も思つたけれど、いまわたしがここにいることが、それを打ち消す決定打に違いないのだろうと勝手に考えた。

10時半を長針がまもなく迎えると「うら」と、足音が聞こえ、そのあとに部室の扉が、じんこんと澄んだ音を鳴らした。1秒待たずして扉が開く。

「あ、部長。さすが早いですね」

聞き慣れた声を発しながら、待ち人は当然のように姿を見せる。黒い学ランに身を包み、見慣れた顔と無造作な髪型が、彼であることを認識させる。

わたしは、彼を横目で追いながら、適當な返事を用意する。

「言い出したのはわたしだし、当然だ」

平静を保てているのだろうか……ふと、そんなことが心配になつた。

「外すげえ寒いですよ。あ、やつぱり部室あつたかいなー」

彼は鞄を肩に掛けたまま、僕も僕も、と言つてわたしの隣、いやストーブの前へやつて来て手をかざす。

「やつぱりストーブ持ち込んで正解でしたね。もし無かつたら今頃、凍え死んでますよ」

「まあちょうど家に余っていたものだったから、学校側も生徒たちが凍え死ぬくらいなら電気代くらい大目に見てくれるだらう

「部長のおかげですね」

「まあな」

手をひらひらさせながら答える。

「でも、ここまで運んだのは」

「君らだな」

そう答えると、彼はうれしそうな表情を浮かべ、わたしの顔をのぞき込む。

一瞬の沈黙が、異様に長く思われる。

「部長、眠いんですか？ いや、眠たそうですよ」

少し心配そうな表情に変え、寝てないんですか？、と付け加える。

まったく女子に対して失礼なやつめ。

「後輩たちへのいたずらを考えていたら、眠れなかつたな」

「変態ですか？」

「勝手に言つてろ、ばか」

部室の寒さはストーブによる熱風で、ほとんど取り払われていた。

「それにしても、まさか大掃除で祝日に呼ばれるとは思いませんでしたよ」

彼は窓の外に視線を向け、大っぴらに呟いた。

「迷惑、だつたかな……」

「いやいや、ぜんぜんそんなことないです。今日暇だつたんで。しかも、お世話になつた部室だし、大掃除してあげるのは当然です」偽りのなさそうな笑みを浮かべ、こちらを見やる。

「それに僕、部長の手下一号なんで、言われたからには何が何でもやりますよ」

そんな恥ずかしい」とをよくストレートに言えるものだ、といつもながらに感心する。

「ありがとうございます、とだけ言つておひつ」

素直に感謝を言えないわたしは、遠回りをして辿り着いた。

彼は一旦ストーブから離れ、長机の椅子をこじらせて持ってきて、再びわたしの隣へやって来る。手には最近愛読しているだらう本が握られていた。

「なんか今日の部長、やさしいです。……いつもだつたら、もつとなんか勝手というか気にしないとこつか」

「話はまとまつてから話せ」

「……はい、でも僕が何か言つてこなだり、殴つたり」「殴り、ではなく教育だ、と何度も言つてているだらう。……それにわたしは別に普通だ。ただ今日が、その、12月23日といふことで気を使つているんだ」

「あー、みんな忙しい時期ですもんね」「この時期は、みんな忙しいものか……」

「で、僕のほかにも来るんですね？」

彼はそう言いながら、壁に掛けてある時計に視線をすらりす。わたしはわざとらしく携帯電話を鞄から取り出し、画面を見ながら独り言のように呟く。

「あー、あいつらはなんか揃つて遅れるらしい……まあなにから用事があるんだらう。一昨日、急に誘つたわけだし、しょうがない」

「僕は昨日、誘われたんですけど」

「一昨日はたしか会わなかつただる？ それに、急に誘つても来るだらうと」

「信用してくれてたんですね！ ありがたいことだ」

彼は何の気なしに、わたしを慕つてゐるよつゝな台詞を言ひ。まつたくこちらが恥ずかしくなるほどだ。

しばしストーブの唸りのみの沈黙が続く。

彼は手に持つていた本を開き、視線を落とす。紙の擦れる音が耳を触る。

今年の春、彼が入部したての頃は、部長の権限を振り回すようなわたしの行動に、多少の文句を垂れていたのだけれど、いつの間にか物わかりがよくなつていった。わたしとしては後輩に示しが付いたから結果として正解だった、と思う反面、年上として申し訳なく思うことも少なくはなかつた。

自由気ままに過ごしていた中学時代。それがあつての高校生活2年目の冬。でも、もう自由奔放に生きていける訳でもないし、人間関係のことを考えれば、自分を押し殺して、周囲に合わせていくのが道理なんだろう。

それでもこの部活内では、部長として、それなりに自由に、勝手に行動してきた。そしてそれが自分の性格なんだろうと自覚も出来た。言つてしまえば、普段の学校生活なんかと比べると、数段楽しい経験をしてきた。

当然、部活が好きになつた。そして、わたしが勝手に行動しても、付いてきてくれる部員が好きになつた。

ストーブの前で本のページを捲る部員に視線を移す。

もちろん彼だけではない。後輩の男女、もう一人は文芸部創設当時から付き合つてくれた親友のゆきだ。みんなわたしの大切な部員、いや仲間だ。

でもそれはわたしの勝手な見解だ。全てわたし自身の目線の話だ。今まで他人に認めてもらおうなんて考えもしなかつた。でもそれはやはり間違つているのだろう。

これからもわたしがわたしであるためには、せめて大切な人から認められるような人間にならなくてはダメなのだろうと、今さらになつてバカみたいに悩んでいるのである。

閉め切つた窓から見える冬の空は、より一層雲を濃くし灰色がか

つていた。

感じ慣れた心地よい沈黙が、ひたすら時間を進めていく。時計の針は11時を指していた。

「ゆき先輩たち遅いですねー。あれから連絡ないんですか?」
そろそろ本題の導入部分を考えていたわたしの思考に、彼の声が再生される。

「あ、ああ。まだ来ないみたいだな……あと2・30分は掛かるんじゃないかな?」

平静を保ち、横目で彼の姿を捉える。椅子に前屈みになり、まだ本を読んでいた。

「だつたら集合時間もつと遅くしても良かつたかも知れませんね。部長だつて忙しかつたんじやないですか?」

「いや、わたしは忙しいタイプの人間じやないから」

「カテ「ライズされるものなんですか?」

彼はそつと本を閉じ、わたしの方に向き直つた。

「やういえば、部長。ゆき先輩からいい情報を聞かせてもらいまし
たよ」

やけに楽しそうな口調で語る。

「ほつ、なんだ」

「部長のことに関しています。でも言つたら部長多分怒ると思います
「怒ると分かつていて、話題を振るとはいひ度胸だ。とてつもなく
氣になるよ」

言つてみな、と優しく諭してみる。しかし、ゆきのやつ、まさか
わたしが隠してきたものを言つたのではないよな…… 親友だから、
信じて打ち明けたのに裏切つたというのか……

心臓の鼓動が激しくなつてているのをひしひしと感じ取れた。

「怒らないですか?」

「内容次第……」

「怒らないで下さい」

「気分次第……」

「えつと、ケー・タイ小説を書い　　」

「一触即発！」そのことか！

椅子を大胆に後方へ押しだし、威嚇の意を込め立ち上がる。

「うわっ、すいません！ やつぱり聞かなかつたことにして下さい

……」

彼は、咄嗟に頭の前へ突き出した手をゆっくりと降ろしながら、こちらの表情をうかがつてはいる。その表情は驚きにい満ちていたが、むしろ驚いたのはこちらだ。わたしの予想の斜め上を貫通する情報だった。

くそっ！ ゆきのやつ、まさかそのネタを振つてくるとは思わなかつたぞ！ よくもわたしの忌々しい過去を…… ああ、顔が赤くなつてはいるのが自分でも分かる。暖かさが充満しかけている部室で、さらに熱さは増すばかりだ。

「……読んだのか」

「えつ？」

「だから、その…… わたしの書いたケー・タイ小説を読んだのか、君は……」

「い、いや、読んでないです。ゆき先輩からは、書いていた、とか聞いていません」

本当です、と強調して付け加える。純真な目がそれを事実と裏付ける。

「そうか…… それはあれだ。過去の、若かりし頃の過ちみみたいなものだ。掘り返しても面白くないから、そつとしておいてくれ」

少し睨みを効かせ、心に釘を打ちこむ。また、怖い先輩という評価が上がつてしまつのかな、と少し悔やんだけれど、こればっかりはしようがない……

「……読んでみたいですね」

彼が消え入るような声で、ぼそりと呟く。

「あ？」

「その、部長の書いた小説、読んでみたいですね」

「この男、懲りていない！？」

「ばかか君は！ そんなにわたしに恥をかかせたいのか！」

「いやいやいや、そんなつもりじゃ……」

左右に大きく首を振り否定の意を表す。

「でも、部長がせっかく書いたものですし、…… 文芸部後輩の自分としては、先輩の作品を読んでみたいって思つのは、と、当然です！」

そんな直球勝負で断固たる決意を投げつけられても困る。せりに身体が熱くなるわ……

「もう、あの過去は捨て去つた。今さら「み箱を漁ろうなんて思わんぞ」

「大掃除だし、いいじゃないですか……」

「なにがいいのか「さつぱり解らん」

「でも、ゆき先輩言つてました。まだ残つてて、投稿してから時間が経つていても関わらず、いまだに人気だつて…… 読ませてもらいたかつたんですけど、部長に直接頼んで見せてもらひなつて」
ゆきという女、どこまでも迷惑千万なやつ…… 書庫整理の分担は決定だな。

わたしが後の掃除分担に思考をばべらしていくと、彼は少しためらいながら口を開いた。

「あの、僕、…… 部長の全てを見たいんです。過去だつて知りたいし、これからも……」

わたしの思考が一瞬停止した。え？ 今すごい恥ずかしいこと言われなかつたか？

彼は真面目な口調で言つたからなのか、少し赤面していた。

あー、なんか今の一言でどうでもよくなつた気がする。ストーブが強すぎて頭がぼーっとしてきているんだな……

「分かつた。そこまで言つなら見せてやる」

わたしは過去何度も見たであろう、その遺産の*CD*を彼宛のメールに添付して送る。バイブルー・ショーンの音が、若干の気まずさを漂わせた部屋に響き渡る。

「それが、わたしの恥じたる歴史の産物だ。おつまひ帰つて読むのだな」

「あ、ありがとうございます」

この件を締めくくり何とも言えない虚無感に至つて、冷静さを取り戻したわたしは、その小説の内容をほんやりと思い返していた。それに書いてある、今となつては恥ずかしい台詞が次々と頭をよぎる。

ダメだ。やつぱり家でも読まないでくれ、と先ほどの考えを改めようと彼を見る。しかし、そこにはケータイを開いたまま、一向に画面から田を離そうとしない彼の姿があつた。

途端、急に身体が再加熱される。

「読んでんじやねえええ！」

考えるより先に、言葉が飛び出た。叫ぶと同時に、腕が体全体を伴つて彼のケータイへと伸びる。彼は、何ごと！？、とでも言うかのよくな表情でわたしのほうに振り返り、咄嗟に手を上げ、ひよい、と伸びてきた腕をかわした。自分でも思つていなかつたほどの勢いで掴みかかったので何の抵抗もなく、そのまま体ごと前のめりに倒れ込んだ。

彼とわたしのアホみたいな声と同時に、倒れ込んだ先にあつたストーブが、ピーッと音をたてて停止した。

「いたたた……」「いつてえ……」

お互の呻きが重なつたように聞こえるくらい、その声はとても至近距離で感じられた。

倒れ込んだ勢いはかなりのものだったが、衝撃はそれほど感じなかつた。反射で目をつぶつてしまつていたが、何かがわたしのクツ

ショーンとなっていた。

この状況にして、この感覚。どう転んでも彼がわたしを受け止めているのは明白だった。

ストーブが消え、このままだと再び寒さが押し寄せる、と頭の隅では考えながら、倒れ込んだときのいささかのタイムラグを修正し終わったところで、彼が少しうごめいた。

「……ふ、部長。その、重いです」

「君はバカだな。この状況でさらにわたしを貶める気が」
あくまでも冷静に、反射でつぶつた目をそのままにして答える。
多分、いま目を開けたら、わたしは負ける。自分が自分に負けて、
わたしがわたしを保てなくなりそうな、そんな気がした。
「部長、体とか大丈夫ですか？」……あ、変な意味じゃなくて、そ
の、腕とか、足とか擦りむいたりしてません?」

その心配がなんだか心地よく耳に伝わる。

「痛くはない……それより君は?」

「あ、僕ですか。た、多分大丈夫だと思います。えっと、痛いのは、
慣れてますから」

「そうか、わたしの教育に感謝するのだな」

「は、はあ……」

彼の納得いかない顔が目に浮かぶ。

段々と、わたしの思考は柔らかくなつていいく。
完全な静寂が部室の中には満ちていた。

「……部長? そろそろ、その、自力で立てるなら
「立てない、かも」

「えつ?」

あー、失敗失敗。気を緩めすぎた。わたしのキャラに合わねえ……
少し息を吐いて、気持ちを落ち着かせる。

「立つ前に、ひとつ聞いておきたいことがある」

「僕に、ですか?」

「おまえ以外に誰がいるんだ」

「はい…… でも、立つてからじや 」「ダメだ
わたしは、ぴしゃりと否定する。

出来ればこのまま、このままの勢いで聞かなければ、1年間、先送りしそうな気がする。

時間的にも、気持ち的にも、これが最後のチャンスだらう。

「なあ。君は、あした何か用事でも…… あるのか

「え？ ……えーと、特には

「ないんだな？」

「はい」

今思つてみると、ここまでは普段の余話と何ら変わりはなかつた。昨日の今日のことである。本番はここからだらう、と閉じた目に力を入れ、気持ちに勢いをつける。

彼は静かに聞き入つてゐるよつて思えた。

「あした、もし君が良かつたら、その……」

途中で詰まる。一気に言え、バカ。

「その、一緒に、過ごすなんてどうだらうか」

静寂が部室を包むにも関わらず、頭の中は割れるよつて騒がしくなつた。自分のすこしきくなつた呼吸でさえ聞き取ることが難しい。

「……わかりました。いいですよ」

「ふえつ？」

あまりにも唐突というか、じくありふれた用件の返事のようであつたので、思わず変な声を出してしまつ。了解されたのだろうか、されたのだろう、と頭の中で2・3回復唱され、その返事のように自然とわたしの意識も力が抜ける。

「お、おい。な、なんだその返事は…」

ついこんなことを口走つてしまつて、先ほどから守り抜いていた目を開けてしまつ。本心を確かめたい気持ちが行動を加速させた。

態勢が態勢だけに、お互いの顔は見えないのだけれど、目を開けた途端に、彼の温もりが今まで感じたことのないくらい膨張して伝わってきた。そしてわたしの頭の真横には、彼の吐息が感じられるほど近くに、彼の顔があつた。目を開じていたときの幻想的な感覚から、一気に現実の感覚へと引き戻されたのだ。

ストーブが消えて数分が経過し、沈黙も続いていた。しかし、身体が急に熱を帯び、心臓の鼓動が一斉に鳴りだしたのを感じ取れた。

「だあああ！」

わたしはいよいよ恥ずかしくなって、急にその場から離れようと暴れ出す。うわっ、と彼が驚いて、少し後方へ身体を引き摺った。その隙に、態勢を立て直し、膝立ちになり腕で身体を支える。

その腕を不意に掴まれた。

「部長、落ち着いてくださいよ！」

「つこ、こんな状況で落ち着いてられつかー！」

彼に掴まれた片腕を引き離そうとするが、予想以上の力で固定されていた。

「さっきまで普通にしてたじゃないですか」

「さっきのわたしはわたしじゃないの！」

自分でもよく解らないことを叫ぶ。離れようにも離れられないので、身体いっぱいに力を入れて顔の火照りを誤魔化しながら口を噤む。

「わかりました。だから一旦落ち着いて、……ね？」

その言葉で、握られた腕の拘束が弱くなる。それに追随してわたしも力を抜き、少し心が落ち着いた。もう片方の手で乱れたであろう髪を適当に整える。

「部長、大丈夫ですか？」

「あ、ああ。急に暴れて悪かった……」

「いや、僕がなんか変な返事をしたのがいけなかつたんですね。

でも、あの場合なんて答えればいいかななんて、僕には分からなかつたです」

あー、もうわたしのバカ！ こんな時に後輩に気を使わせるな。
「あれは別に、君が悪いのではなくて…… その、君の答えがあまりにも淡泊なものに思えたから」

「そんなことないです！」

いまだ掴まれている腕に、彼の感情の力みが伝わる。そのあとに「淡泊なものなんかじゃ……」と語尾を濁らせ、俯きながら呟いた。そんな彼の態度に、自分がものすごく不敏に感じられてしまつ。知らぬ間に目がうつすらぼやけていることに気がつく。多分、わたくしは今、顔をまつ赤にして、耳には涙なんか溜めちゃつて、文芸部部長らしからぬ、不格好な醜態を晒してしまつていいんだひとつ、傍田での態度を想像する。最悪だ。

彼にはこんな姿を見せたくないと思いながらも、手で顔を隠すことも出来ず、後ろを向くことさえ許されない。ただただ下を向くことしか今のわたしには出来なかつた。

「部長……？」

彼は気遣うように顔をのぞき込む。ダメだ。こんな姿、見てくれるな そう思つと余計に涙が溢れ出す。頬を流れるなんて何年振りだろ？ どうでもいいことを考えていないと耐えられなかつた。

「さつきのは、強制、なんかじゃないから…… 君の本意が……

「聞きたい」

わたしは涙でかすまないよう、振り絞つて声を出したのだが、途中、軽い嗚咽で引っかかり、思つよが云つたのかと不安になる。

「あしたの、ことですよね……？」

優しく諭すような声でこちぢりで同意を伺つてくる。下を向きながら声にならない顔で答える。

彼はそれからひと呼吸置き、ゆっくりと聞かせるよが口を開いた。

「強制なんかじゃなくても、僕はあした、部長と一緒に過ぐします」
その言葉は、少し広めの部室内では、ちつぽけだと感じてしまうくらいの声量であった。しかしそれが、断固たる決意、であるとわたしに思わせる要素を含んでいたのかも知れない。それが単なる自己解釈だとしても、決して間違いなどではないと言える自信がある。それは言わば、慣れ親しんだ普段の会話とは僅かに違う、そこに決定的な彼自身の本意があるものだつた。今、わたしが彼を感じ取ることが出来るのは、掴まれた腕の感触しかないのだけれど、その僅かな違いを見つける作用としては充分過ぎるほどに感じ取ることが出来た。

彼が本意を伝えたのであれば、わたしもまだ伝えていないことを、わたしの本意を、語らなければならないと…… その意志が原動力となり、わたしはとうとう顔を上げた。

そこには、先ほどの咄嗟に離れた行為に似つかわしくなく、距離を全く感じることができない、隙間を隔てて、彼の見慣れた顔があつた。ここにきて、恥じらうことを取り扱うことは無理だと実感したのだけれど、それでもわたしは怯まない。なぜなら、これから言うべき台詞は、とうの昔に決まつていたことだから。

「あしたは…… 何の由か、知っているのか……」

まだ軽い嗚咽が、言葉を絡め取つて離さない。

「ええ。あしたは、クリスマスイブですね」

「そう…… それでも、わたしと一緒に…… 過ぐしてくれるか」「はい」

彼は短く答え、わたしの途切れ途切れの言葉を真剣に聞いている様子だつた。お互いが向き合ひ、至近距離で話しているので、こちばゆいほどに吐息がかかる。

「二人…… だけだぞ…… わたしと君の、一人だけ……」

「始めから、そのつもりです」

「午前から、9時くらい、から、丸一日……付き合わせるや」
「付き合います。部長の心ゆくまで」

わたしの独りよがりの要求にも、彼は意志をもって答えてくれる。その姿勢に再び涙が溢れ出す。いつからわたしは、こんなにも泣き虫になってしまったんだろ、と滑稽に見えたる自分の姿を想像したが、もう、正面を見据えた顔は下を向くことはなかつた。

「世間では……それ、デート、つて言うんだって、な……」

「ええ。デートですね。あしたは、二人でデートです」

やさしく無邪気な笑顔をこちらに向ける。わたしの涙で崩れかけている顔と向き合わせるのは申し訳なく思つてしまつくらい綺麗だつた。素直に、かつこいい、とバカみたいな考えが浮かぶ。

そして、わたしは最後に、まさか自分の口から言葉にするとは予想もしていなかつた台詞を頭に浮かべる。

それは、とある小説の一文。

傲慢でわがままな主人公が、恋に落ちてしまうだけの短い話。

わたしが去年、今のよつな寒い時期に書いたケータイ小説に綴ら
れている、告白の台詞。

そして、わたしが彼に、いまの想いを伝えられる、最善の言葉。
「こんな、わたしでも……いいのか……？」

涙のせいで声が擦れて、部室全体には到底行き渡らないけれど、たしかにわたしはそう言つた。至極単純な短い一文。しかし、その一文に出来る限りの想いを詰め込んだ。

他人が他人を認めるという事実。それは、本意に表さないと決して分かり合えないことだから

その台詞を聞いた、黒い大きな瞳孔は、全くのぶれを感じさせないものであつたが、その瞳はうつすら水気を帯びていた。そして、彼は僅かばかりに唇を振させ、軽く息を吸つた。

「はい」

明白な答えだつた。

「部長は、自由で、少しづがままで、たまに振り回されることもあるんですけど、でもやさしくて、後輩の僕たちのことを一生懸命考えてくれたりして、それだけすごく嬉しいんです」

彼の頬にも涙が伝づ。

「部長は、いや僕にとつての部長は、ずっとそのままでいてください。これは僕のわがままです。あしたも、明後日も、冬休みも、来年も、再来年も、その先も。ずっとです。……好きなことを楽しんでいる姿や、僕につつこみ、じゃなくて教育してくれる部長、そして今みたいに可愛らしい顔を浮かべる部長。他にも僕の知らない一面も。……僕は、部長の全部が好きです」

そこまで言づと彼は、すいません、と手の甲で涙を拭つた。

彼の放つた言葉は全て理解できた。わたしを、今までのわたしを認めてくれたこと。これからもそのままでいてほしいこと。そして、彼がわたしを好きだと言つたこと。理解できたはずなのに、望んでいたことが叶えられたはずなのに、素直なうれしさはそれほどわいて来なかつた。でもそれは、これから一人で紡いでいくものなのだろうと、わたしはわたしの解釈で、結論に至つた。場慣れしない恥ずかしさだけがわたしを包む。

「ばかっ…… 女の子を前にして、男は泣くものじゃない……」「すいません……」

「それに、さつきみたいな」と言われたら、……これから君のこと、殴れないじゃないか

「教育だって、言つてたじやないですか」

そのあと、取り留めのないやり取りを2・3回交わし、彼とわたしは長机を挟んで対面に座つていた。ストーブは停止したままなので、部室内には少しづつ寒気が流れ込んでいたが、どうしても立つ

て点ける気にはなれなかつた。

沈黙が続く。

「あの……」

始めに口を割つたのは彼の方だつた。

「お、遅いですね。あとの人たち」

「ああ……」

こちらの位置からは時計が見えない。振り返る動作すら適わない
と体が拒否を示すので、正確には分からなければ、あと10分ほど
で、本来の集合時間である11時半を迎える。その時間には3人
とも来るはずだ。

昨日の朝、ゆきに、相談していた内容の展開を勧められた。なか
なか渋つてゐるわたしに、彼女は『明日の大掃除の前に、彼にクリ
スマスイブの予定を聞いて、そしてデートに誘つて、そのまま想い
も伝えちゃいなさい！ わたしもう親友が悩んでる姿なんて見たく
ない。言わなかつたら絶交だからね！』と言つてきた。

そして彼女は、彼とわたしが一人でいられる1時間用意してくれ
た。その時間で全てを伝えなさいと。

図らずも、わたしはその1時間で全てを成し遂げられたわけだけ
れど、きっかけは倒れ込むほどの衝撃を与えた、ゆきの情報提供な
のである。そして一番伝えたかった想いを端的にまとめた一文を、
あの場面で思い起こさせたのも、ケータイ小説の話題があつたから
だつた。

偶然なのか、必然なのか。そんなことは實際どうでもいい。結果
的にわたしは親友に背中を押されて、倒れ込んで告白できた。あの
まま何もなければ、伝えられなかつたんだろうなと思つ。

ゆきという女、末恐ろしいほどにわたしを見抜き、行動させた。

愛おしこそひの、わたしの親友である。

「あ、部長
再び彼が口を開ける。

「あしたのデーター……どこに行きたいですか?」

「あ? えーと……」

急な問い合わせが詰まる。データーって普通はどこに行くものなのだろう。……困った、考えつかない。

「部長の行きたいところなら、どこでもいいと思います」
彼はそう言ってわたしの解答を待ってくれている。
でも、そんなことより一つ気になることがあった。

「なあ

「は、はい」

「その、一応もつ、あれなんだし……」

「あれ、ですか?」

「あれはあれだ。で、一人だけのときは……その、名前で呼んで
欲しい、かも」

「僕が部長ですか……?」

「ククリと頷く。わかりました、とく惑いながらも、彼は少し息を
吸う。

そして

「あ」「ティロリン、と軽快な音が鳴り彼の小さな声は搔き消されてしまった。メールが来た。今のタイミングでメールが来たのだ。着信音のばかーーこういう時こママナーモードを貫き通せ、ばかばかばか!

もう既に言い終えて照れた雰囲気を醸し出す彼には、もう一度言つて欲しい、などと言える訳もなかつた……

仕方なくケータイを確認すると、メールはゆきからだつた。

『終わったみたいだから入るよー』 ケータイは投げられた。

「あ、ちょっと部長ビートくんですか！？」

「名前で呼べー！」

わたしは咄嗟に部室の扉を開けた。

廊下には見知った顔の3人がいた。いずれも文芸部部員で後輩二人と、親友、という発言は取り消して悪友のゆきの姿だった。

急に部室から飛び出してきたわたしに、驚く男女。

「急に飛び出してきてどうしたんすか」

「ゆき先輩が、まだ入っちゃダメっていうからここで待ってたんですけど……寒いですよー」

二人とも何があつたんだろうと不思議そうな顔を浮かべている。わたしが刺すような視線を送ると少し怯え、そしてその横にいる、いやらしく笑う女に目を移す。

(こいつらに言つたのか……！)

そんなアイコンタクトに気づいたかは分からぬが、ゆきは手のひらを上に向け、さあ、と首を傾げるのみだった。

「もう入つていいみたいね。さあ、寒いから中に入りましょ」

その言葉に連れ、ゆきは後輩たちと白々しく部室の中へと入つてしまつ。わたしも渋々戻らざるを得なかつた。

部室内には長机で本を広げ、「なんでお前だけ先にいるんだよー」と言われて、適当な言い訳を取り繕つてはいる彼の声が聞こえていた。

「あれ？ ストーブ点いてないのに、ずいぶん部屋の中が温かいね」アツアツだ、と、ゆきがわざとらしく口にした。

「お、おまえー」

「あ、見て下さい！ 雪が降つてますー！」

「お、マジだ！」

後輩二人は彼への言及を止め、上機嫌に窓を開け、外に首を突つ

込む。部屋の中にひとつと寒気が入り込む。彼も窓の方を眺め、うれしそうにしている。小粒ではあつたが、冬空にはたしかに雪が舞っていた。

「うまくいったみたいでよかつたね」「ゆきがわたしに囁く。

「いつから見ていた

「寒くて、あつい二人を見てないと凍え死んじゃうくらい

「楽しんでたな

「みんながしあわせなら嬉しいもんね」

につこり微笑みながら語る彼女。まあ、たしかにな、と心が許していたので、今はそれに従つておいつ。

後輩たちのうしろから雪の舞う空を眺めると、灰色がかっていた空さえ白く色づいているように思えた。

校庭の方からは、雪だ、雪だとはしゃぐ声が聞こえる。野球部だつてきつい練習だけではなく、冬空のプレゼントはうれしいのだろう。

よし、あしたの予定は決まった。部員全員のプレゼント選びでもしてやう。

わたしの田線ではあるけれど、そこに映った全員がしあわせであるように思えた。きっとそれは間違いなんかじゃない。みんながそれを認め合っているのだから。

あしたも降つてくれるかな、と自由なわたしはそんなことを思つていた

「大掃除、はじめるぞーー！」

終

(後書き)

「むらのサイト」には初めて投稿をさせて頂くものです。

少し男混じりの女の子が主体の、気持ちを描いた小さな物語です。展開は全くといっていいほどなく、日常的な一幕をだらだらと書いてしまっているような気がして、読まれた方が不快に思われたらすみません。

ただ、読んで指摘や批評などで、いろいろ「教授願えたら」と思つております。

内容の時期的には投稿時期と被りますので、わたしの思いとしては、幸せな気分になれて頂けたら嬉しい限りです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6422z/>

冬空に紡がれる小さな名もない物語

2011年12月21日17時46分発行